

参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学びの可能性

坂本 南美 (岡山理科大学)

今井 裕之 (関西大学)

前田 幸也 (兵庫県立大学附属高等学校)

岩本 華苗 (九州大学)

1. はじめに

本シンポジウムでは、大学教員1名と中学教員の経験を持つ大学教員1名、高校教員1名、中高時代に彼らのもともと英語を学んだ学習者1名の4人が、それぞれの立場から捉えた英語教育について語りを深めた。各登壇者のナラティブを会場全体で共有しながら、英語教育の可能性についてフロアとともに考えていく時間となった。まず、今井が大学教員として小学校現場に関わる中で小学校での授業実践から見える問いを提案した。続いて、坂本が英語教師の役割について触れながら、中学校での英語授業という営みの中で、具体的な教育実践を通した教師の信念について探究した。引き続き、前田が高校教員として、日々の授業で生徒の英語学習への意欲を引き出す取り組みを紹介し、大学受験を視野に入れた授業実践とそこに根ざす自らの教えの理論について語った。最後に坂本・前田のもとで学んだ学習者の岩本から、中高での英語授業の学びの振り返りを基に、大学生となった現在の自分と英語との関係について語られた。4人の発表後、大きな変革の時期を迎えている日本の英語教育とそれを担う教育現場での取り組みについて、フロアとの質疑をもとに活発な意見交換が行われた。

2. 小学校英語授業支援を通した教師と研究者の協働 (今井裕之)

過去最大規模とも言われる「英語教育改革」の中で、小学校外国語教育は、3,4年生が週1回「外国語活動」として、5,6年生が週2回「外国語科」として2020年度実施されるに至った。1996年以来小学校英語教育の授業研究・支援を続ける筆者は、小学校英語教育を通して、児童たちの英語との向き合いかた、授業者の工夫や苦労を見てきた経験から学んだことを共有したい。

2020年から実施される学習指導要領には、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」からなる学力の三要素がうたわれているが、外国語科では特に「知識・技能」を一体化した指導(文法を知識としてだけ教えることはしない)、「思考力・判断力・表現力」育成のために4技能(聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと)を個別に教えるのではなく、統合的に指導することが、新たな課題として議論されているが、小学校での英語授業においては、これらはすでに当然のこととして授業が行われており、「言語を使用しながら学ぶ」アプローチが、当初から模索されてきた。今回の学習指導要領では、学習内容とともに学習方法の提案も行われ、「思考力・判断力・表現力」の指導においては(1)言語使用の目的場面状況を設定・理解し、(2)コミュニケーションの見通しをたて、(3)目的達成のためのコミュニケーション活動を行い、(4)活動の振り返りを行うことが提案されているが、すでに現状の小学校英語の授業が、(結果的に)このプロセスに沿ったかたちで実施されている。

それゆえに小学校段階でも「場面状況下での英語での会話活動」や「ポスター・プレゼンテーション」が行われ、日常の授業での英語使用比率も、むしろ中高より高いこともあるくらいである。中学校や高等学校では学習指導要領や教科書の構成が、文法シラバスを軸とするため「言語の形式(音声、文字)」→「言語の意味」→「言語の使用」の順で英語指導する授業展開が一般的であったが、小学校では「言語の使用(目的場面状況)」→「言語の意味」→「言語の形式(音声、文字)」=こういう場面で、どんなことを言いたいのか、どんな言葉を用いて伝えるか、という逆のアプローチで外国語に習熟していく。そのような指導方法が継続されると、今までされたことのない質問が学習者たちから出てくる。例えば、**What time do you go to school?**と尋ね合う活動では、「それは学校に着く時刻ですか、自宅を出発する時刻ですか?」と児童から質問されて先生が焦っていた。また別の授業では、**Can you play soccer?**と問いかけられた児童が、「しよう、しよう!」と応じていた。つまり言語の使用目的や場面状況を踏まえて聞いており、その問いに含意される発話の意図(誘われている)を受け止めて、応じることで言語を学んでいる姿が見られている。

もう一つの小学校の特徴が「振り返り」である。ポスター・プレゼンテーションの後の質疑応答がうまくできなかった児童たちが、どうすればよいかを話し合い、再度ポスター・プレゼンテーションを行った時には、振り返りで確認した表現を使いながら質疑応答を行っている。その結果「生きて働く知識」として表現方法を学んでいる。小学校英語授業支援を長年続ける中で、知識技能の定着練習を前提とせず、言語活動を行いながら自己省察を通して知識技能を学ぶ新しい学習指導要領の提案を、小学校の先生方から学んでいたのは私のほうだった。

3. 英語教師としての教えと学び—中学校・大学での授業実践より— (坂本南美)

本発表では、4技能5領域を総合的に取り入れた中学校での授業実践と学生が自らの学びをデザインする大学での授業実践を紹介しながら、英語教師の教えと学びの本質について探究した。

(1) 育成を目指す資質・能力の3つの柱

新学習指導要領では、育成を目指す資質・能力として「知識・理解」「思考力・判断力・表現力等」「人間性・学びに向かう力等」の3つの柱を示された。これらが英語授業の中でどのような形で具体化されるかを概観した。

(2) 自律的な学びを引き出す英語授業デザイン

中学校の英語授業は、各レッスンに埋め込まれた新出文法を軸とした教科書に沿って展開する。その中で、教科書を学ぶことから教科書で学ぶ内容へと視点を移し、自律的学習者を育む授業デザインとして、5つの提言を行った。①基本的に言語の学習はインプット→インテイク→アウトプットの一環だと意識する、②英語を使うための素材を持たせる、③授業の流れの中に自然な場面・状況をはめ込む、④今、ここで英語を使う相手への意識を持たせる、⑤今、この瞬間の教師の役割を意識する。これらを基盤にした授業実践を紹介した。

(3) 授業の中の教師の役割

Raphael (2002) は、教師のコントロールの強弱と学習者のアクティビティの高低を指針に、教室の場面に応じた5つの教師の役割(直接的に指示を出す者、モデルとなる者、足場掛けをする者、ファシリテーター、参加者)を提言した。自律的学習者を育てる視点から、英語を媒介として生徒たちと他者や社会、世界との関係をつなぐファシリテーターとしての役割は一つの重要な鍵となる。

・実践例①「スキット・ショー」(中学校)

友達と遊びに行く計画について、中学1年生のペアによる創作スキット・ショーの実践を紹介した。疑問詞などの既習学習項目を用いたシナリオ作成から発表まで具体的計画も含めて、英語によるやり取りを通じた創作表現活動の例を視聴した。

・実践例②「海外への手紙」(中学校)

2年生で英文手紙のフォーマットを学んだ後、生徒がそれぞれ海外の著名人に手紙を郵送した実践を紹介した。宇宙飛行士 Neil Armstrong からの返事を受け取った生徒 B の心の動きと、天文学者を目指すという夢についてまとめた彼のスピーチ発表の経緯など、その後の進路選択へ与えた影響についても伝えた。

・実践例③「ティーム・ティーチングによる学生の模擬授業」(大学)

「英語科教育法Ⅱ」の授業における学生の模擬授業の様子を紹介した。生徒役の他の学生を動かしながら、教材、ハンドアウト、PPT ファイルをペアで作成し、実際の授業を見立てた実践からの学びを紹介した。

(4) Quality of classroom life

中学生は心身ともに大きく成長する時期である。社会の縮図とも言われる学校生活の中で、様々なタイプの人がいることを知り、その中で友情を育んだり、ぶつかったり、夢中になれるものを見つけたり、自己について深く考えたりする。英語授業は、外国語学習を通して、言語を「媒介」としながら個の成長を助け、協働的な学びの中でクラス全体を成長させることを目指す空間でもある。現在の文脈では教師を目指す学生との教育実践も含めて、教師と生徒の教えと学びを紐解く中で、教室に生きる者たちの日々の営み自体が quality of classroom life を高めることを、実践者として、また研究者として学んでいる。

4. 高等学校における英語指導の実践 (前田幸也)

本発表では、高等学校における英語教育の現状を概観し、その上で実践している取り組みやそれを支える思想や理論を示した。また、ALT (Assistant Language Teacher) の重要性や入試改革への取り組みも示した。

(1) 「現状報告」

現在、勤務している兵庫県立大学附属高等学校では主に英語表現、コミュニケーション英語、PS (Public Speech) の3つの授業が行われている。英語表現では主に文法指導を行っており、説明や問題演習が中心になりがちである。また、コミュニケーション英語では英文を読み、さらに音読活動をしているが、口頭で自分の考えを表現する機会を多くは提供できていない。PSは本校独自の授業であり、1年生ではALTと共に日常会話の練習や Recitation、2年生では Presentation や Debate といった活動を行っている。また、文化祭の一部として英語のみのイベントを行うなど積極的に生徒を英語に expose する機会を与えている。

(2) 「実践」

上記の現状を踏まえた上で、授業実践を紹介した。これらの根幹にある考えは「バランス」であり、「話す」「聞く」「読む」「書く」のバランスを重視している。また、「個人とグループ」「安定と流動」「思考と活動」「受動と能

動」などの視点を授業に活かすことの重要性を示した。紹介した取り組みのうち2つを以下に示す。

①単語遊び

ほぼ毎回の授業で単語の確認を行っている。単語の確認は「テスト」という形で行われることが多いが、それゆえ生徒も飽きやすく、単調になってしまう。しかし、ノートに書かせる活動や口頭での活動、またペアやグループといった要素を単純な単語の確認と掛け合わせることによって、様々なバリエーションを産み出し、生徒にとって「単語を覚える」という作業が楽しいものになるような工夫を凝らしている。それによって、自発的に単語帳で学ぶようになり、Active Learner としての基礎ができると考えている。

②問題作成

普段から用意された問題を解く作業に慣れている生徒に問題を作成させることで立場を逆転させ、問題作成者の意図を感じさせることができる。この際には、単語のような簡単なものから、筆者の意図を汲み取り英語で表現するなど様々な難易度で作成することができる。この過程で生徒は与えられた英文を正しく理解するという受身的な姿勢ではなく、自分自身の意図を持ち、能動的に学習に取り組むことができる。また、用意された問題を解き、用意された模範解答に近づく練習を繰り返すことで、生徒たちが今後向き合う模範解答のない問題やそもそも発見されていない問題を発見する能力の養成にも繋がれば幸いである。

(3) 「まとめ」

上記の活動はあくまでも「枝葉」である。これらの様々な活動を支えている「根」「幹」は、私の考える授業像や学び像によるところが大きい。どのような活動（結果）もそれを支える想い（原因）によって構築されなければならない。結果だけを闇雲に求めても、それは独りよがりの空虚なものになると感じる。授業は「イキモノ」であり、その時々で姿を変える。もちろん、それに対応すべく準備をするが、準備したものを出すだけではなく、いかに「その場」「その時」「その生徒たちとその教師」でしか生まれない「イブキ」を吹き込むかが授業の深まりを決めると考えている。安定を求めながら、不安定をあえて選ぶ。そしてそれを楽しむ。そうした想いに支えられた授業をこれからも実践していきたい。また、従来の教師から生徒への一方的な Teaching ではなく、学習者が積極的に学びに参加し、そうすることによって我々教師も刺激を受け、更なる学びに繋がる Team Learning を実践し、自分自身も成長していきたい。

5. 学習者が捉えた英語教育（岩本華苗）

本発表では、英語学習者から見た英語教育という視点で、ライフストーリーの中で自分が受けてきた中学校から大学までの英語教育を振り返るとともに、その学びが将来を考えるにあたってどのような影響を及ぼしたかについて分析的にまとめた。

(1) 各学校での学び

中学校での授業は、教科書による学習と並行して、創作活動やスキット、チャンツなどを多用した能動的参加型授業だった。これらのコンテンツを通して、協働的な学習からクラスの仲も深まり、英検の取得やテストの点数を競って切磋琢磨することで、楽しみながら英語学習へのモチベーションが保たれた。また、ホームステイやALT との会話、前述のスタイルの日々の授業を通して知識のアウトプットを多く経験し、習った事を実際に使える嬉しさを感じていた。

高校の授業は大学受験のための準備という側面が強く、はじめは中学校での授業との違いに戸惑った。一方で、中学校で常に行っていた「英語で自分の意見を伝える」活動を高校でも自主的に継続し、スピーチに取り組んだり、ALT との交換日記等を行ったりしていた。ここでも、中学校からのクラスメイトと刺激を与えあっていた。皆が英語に一生懸命取り組む「英語を勉強することが当たり前」という環境の中にいたことは、学びを続ける原動力になっていた。

現在は、大学生となり、教師からのサポートがあった中高時代に対し、自主的に英語に関わらなければ、学びを継続することが難しい環境だと感じている。そのような環境でも、中高での学びを無駄にしたいくないという思いや将来へ向けた目標が、自分の中の学びに対する強い原動力になっていると感じる。

(2) 就職につながる英語の学び

これまでのライフストーリーにおいて英語に深く関わってきたこともあり、将来は英語を使った仕事に就きたいと考えているが、日米学生会議や省庁でのインターンの経験から、現在の自分の力ではまだまだ英語を仕事のツールとして使うところまでは達していないと痛感する。自分の英語をより洗練されたものにしていくため、これからも学びを継続するつもりだ。自ら学び続けられるのは、英語学習を楽しいもの、習慣的なものとして抵抗なく捉えることができていること、また卒業しても良い影響を与え合う仲間が存在といった中高時代に築いた“土台”があるからこそだと考えている。この土台を基に、目標に向かってステップアップしていきたい。